

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

フォーラム型情報ミュージアムとしての「津波の記憶を刻む文化遺産：

寺社石碑データベース」<基幹研究：

津波の記憶を刻む文化遺産：

寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良>

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009684">https://doi.org/10.15021/00009684</a>

# フォーラム型情報ミュージアムとしての 「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベース」

文 日高 真吾

## はじめに

「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社・石碑データベース」(以下、寺社・石碑DB)は、2017年11月5日に公開された。寺社・石碑DBが制作された経緯について、発案者の民博館長吉田憲司(当時、文化資源研究センター教授)は、「東日本大震災からの復興支援を視野に入れながら、地震・津波災害の記憶と経験をいかに未来に継承していくのかを考える契機とするため、津波の記憶を残す碑や石塔、さらに神社に関する写真データベースを作成することとした。今後はそのデータベースを、被災した各地域のコミュニティ単位で過去の記憶や今回の津波の記憶に関するさまざまな情報や画像・映像を集積するためのプラットフォームとして活用し、それをネットワーク化することで、いわば震災の記憶のデータバンクを生み出せないかと構想した。」と記している(吉田2012: 3)。筆者はこうした館長の思いを引き継ぎながら、東日本大震災後に設置された大規模災害復興支援委員会の事業として、約5年をかけ、寺社・石碑DBを完成させ、2017年の津波の日にあわせて一般公開をおこなった。

簡単に寺社・石碑DBの概要について紹介しよう。寺社・石碑DBには、日本各地の沿岸部に残されている津波碑や銘板、あるいは津波からの避難先となっている寺社などが登録されていて、所在する市町村名から検索できる基本的な機能となっている。また、DBの項目名は、日本語と英語を併記している。さらに、寺社・石碑DBは、さまざまな人が情報

を追加できることを目的としつつ、入力されたデータを民博できちんと管理していく運用をおこなっている。そこで、データの追加を希望するユーザーから、連絡先など必要事項を記入したメールでの申請を受け付け、確認後、IDとパスワードを知らせて協力者として、寺社・石碑DBにデータを登録する権限を与えている。そして、協力者はパソコンやスマートフォンなどから、いつでも、どこからでも情報を追加でき、データの修正もおこなえる仕組みとなっている。2020年10月現在、444件の情報が登録されている。

## より使いやすい寺社・石碑DBを目指して


このように現在、公開されている寺社・石碑DBは、管理者である民博からユーザーに対して一方的に情報を提供するものではなく、データの登録権限をもった協力者とともに、その内容の充実化を図っている。その点では、すでにフォーラム型のDBの機能を有しているといえる。しかし、多様な協力者が情報を追加していく課題もある。それは、より情報を追加しやすい機能を充実させることである。そこで、寺社・石碑DBを公開後、これまで3回にわたって、操作体験や登録体験のためのワークショップを開催してきた。

第1回のワークショップは、2018年2月24日、25日に岩手県釜石市で開催した「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石」においておこなった。ここでは、来場者に寺社・石碑DBを紹介しながら、実際に登録情報の検索や情報を登録する体験メニューを提供した。参加者のDBへの関心は予想以上に高く、これまで登録されていなかった津波碑の情報提供など、その地域ならではの新たな情報が寄せられた。まさに市民と語り合いながら、DBの情報を充実化させるフォーラムが、このメッセでは実現できていたと考える。

第2回のワークショップは、2019年3月17日に東北歴史博物館で開催した。これは、筆者が代表を務める基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の研究協力者を対象とした。このとき、画面構成や入力項目について具体的な課題が明らかとなった。そこで、このワークショップでだされた意見を集約し、2019年度に部分改修をおこない、現行の画面に反映した。

第3回のワークショップは、寺村裕史(本館准教授)が中心となって、2020年1月27日に、高知県立高知城歴史博物館を会場に、「こうちミュージアムネットワーク」の研究会



寺社・石碑DBのトップ画面 



「郷土芸能復興支援メッセ in 釜石」で寺社・石碑DBを紹介している様子（2018年2月24日、釜石市、和高智美撮影）。

として開催した。このワークショップでは、高知県内の博物館関係者がおもな対象者となった。ワークショップの内容は、ノートパソコンを使用して、あらかじめ用意した位置情報付きの写真をDBに登録するという体験型のメニューとした。このときのワークショップでも、東北歴史博物館でのワークショップと同様に、登録時の使い勝手やより利便性の高い機能の追加について、具体的な提案や要望がだされた。そして、これらの提案や要望は、現在進めているフォーラム型情報ミュージアム「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良」でのおもな改良事項となっている。

## 現在進めている寺社・石碑DBの改修内容

現在、改良を進めている寺社・石碑DBのおもな作業内容としては、まず、管理者と協力者の登録権限の差異化を図っている。これは、現状の寺社・石碑DBでは、一度協力者となると、管理者と協力者の登録権限が同等となり、管理者が把握しないまま、寺社・石碑DBの目的に適していない、新規の入力項目が追加される危険性が明らかとなったからである。そこで、管理者側でしか修正、変更ができない項目と協力者が入力できる項目を整理し、新規に項目を追加する場合は、管理者側である民博と協議のうえ、追加する機能とした。

次に、多角的な視点から地図情報をみることのできる機能を追加した。現行の寺社・石碑DBで使用している地図情報は、Open Street Mapによる所在情報を示している。今回の改修では、ここに国土地理院が公開している標準地図と航空写真ヘリンクを貼り、提供する地図情報の複層化を進めている。このことで、ユーザーは、より所在地情報を把握しやすくなると考えている。

最後に、更新履歴の階層化について紹介する。現在、寺社・石碑DBに登録されている津波碑は、東日本大震災の復興工事に伴って、数多くのものが移設されている。そのため移設

## 日高 真吾（ひだか しんご）

国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授。専門は保存科学。民俗文化財の保存修復方法、地域文化の保存と活用に関する研究。著書に『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』（千里文化財団2015年）、編著書に『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』（千里文化財団2012年）などがある。



国土地理院の航空写真地図による津波碑の所在地紹介。

先の新たな建立位置の情報が付与されると、移設前の建立位置の情報がみられなくなるという課題が生じた。そこで、現在の登録データをすべてDB上でアーカイブ化することとした。このことで、更新される前の登録情報が更新履歴として残り、最新の登録情報と比較できることとなる。

## おわりに

ここでは、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの一環として進めている寺社・石碑DBの改良の概要を紹介した。フォーラム型情報ミュージアムは、「文化の担い手、研究者、マスコミ関係者、教員、学生、一般市民など多様な人間がアクセスでき、情報について意見の書き込みや交換ができる情報生成機能とフォーラム機能を持つ」（岸上 2014: 4）ことを目指したものである。この点は、寺社・石碑DBに関心を寄せた協力者が情報を追加し、DBの内容が充実していく寺社・石碑DBの運用で実現できると考える。また、寺社・石碑DBの内容が充実化していくということは、「日本列島をカバーする津波災害に関する文化遺産の情報の集積庫」としての役割を果たすことにもなるといえる。今後、本プロジェクトによって、より効果的で利便性の高い寺社・石碑DBへと鍛えていきたいと考えている。

## 引用文献

- 岸上伸啓 2014「フォーラム型情報ミュージアムの構築—国立民族学博物館における新たな展開」『民博通信』146: 2-7。
- 吉田憲司 2012「記憶をつなぐ—過去・現在・そして未来」『月刊みんぱく』36(9): 2-3。